HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高柳雄一氏インタビュー ： 研究機関の広報について考えること
Author(s)	目代, 邦康; 岡田, 小枝子
Description	インタビュー
Citation	科学技術コミュニケーション, 6, 117-120
Issue Date	2009-09
DOI	https://doi.org/10.14943/38455
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39302
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC-6_009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

インタビュー

高柳雄一氏インタビュー：研究機関の広報について考えること[1)]

目代邦康[1]，岡田小枝子[2]

An interview with Yuichi Takayanagi: Practice of public relations by research institute

MOKUDAI Kuniyasu, OKADA Saeko

Keywords: broadcast, KEK, web site, science center

1. 解題

本稿は，2007年11月4日に，多摩六都科学館館長の高柳雄一氏に対して行ったインタビューの内容をまとめたものである．高柳雄一氏は，NHKで科学系の番組プロデューサー解説委員などを務められた後，2001年に高エネルギー加速器研究機構（KEK）教授となり，広報室長を務められた．マスメディアから研究機関の広報担当セクションに入られた日本の嚆矢である．その後，2003年に電気通信大学共同研究センター教授，2004年に多摩六都科学館館長に着任され，現在に至っている．このような経歴を持つ高柳氏に，研究機関の内側からと外側からの視点で，広報の役割やあり方について語っていただいた．インタビュアーは，理化学研究所広報室の岡田小枝子である．

このインタビューは，サイエンスアゴラ2007でのミニシンポジウム「研究機関の広報の役割」の中で，公開で行われた．このミニシンポジウムは，これまで交流がほとんどなかった研究機関の広報担当者の，主体的な情報交換の場をつくることを目的として，産業技術総合研究所広報部と理化学研究所広報室との共催で実施されたものである[2)]．ミニシンポジウムの中で，公開インタビューを実施したのは，ミニシンポジウムの参加者が高柳氏の経験を共有し，そこでの議論の指針を得ようとしたためである．

研究機関の広報担当者は，研究成果の社会への発信や，ステークホルダーのニーズに関する情報収集などについて取り組んでいるが，個別の案件の対応に追われ，そのノウハウの共有や，方法論的議論の蓄積はほとんど行われていない．今後よりよい研究機関の広報を生み出していくためには，各研究機関での良い事例の集積や，様々な経験の記録化が必要であると考える．このインタビューの記録は，広報の方法論的議論に関する有用な資料になると考えられるため，ここに紹介することとした．

2. インタビューの内容

岡田：NHK時代，研究機関の広報活動をどのように思っていましたか？

2009年6月30日受付　2009年8月12日受理
所　属：1 自然保護助成基金（Pro-Natura Foudation, Japan）
2 理化学研究所（RIKEN）
連絡先：mokudai@pro-natura.jp

高柳：私は30年近くNHKにいました．約10年間は高等学校や大学の講座番組を主に作り，その後の約10年はドキュメンタリーの取材でいろいろな研究機関に取材に行きました．

その時感じたことはいくつかあって，いまだに覚えているもののひとつは，非常に有名なある先生に取材をしたときのことです．その先生は，とても楽しげに，いろいろと見せてくれて実に生き生きとしていました．科学者がこんなにも，ものにとり憑かれたように自然を眺めているんだということを描きたいと思いました．

広報に関しては，海外では研究機関が taxを払っていない海外の放送機関の人に対してまでも積極的にサービスをします．海外の研究機関では，広報のセクションに取材希望内容を伝えると，アレンジまできちんとします．それに対して日本の大きな研究所では，事務の人が先生の都合を問い合わせ，その結果，暗に断られることもあります．

最近は，日本の研究者の方も非常に話が上手になったので，上手にまとめて話せるようになりましたが，昔は海外の研究者の方が，格段に相手を意識して話していたという印象がありました．

その後はNHKスペシャルのシリーズ番組の企画をし，いろいろな海外の研究機関に１年ほどかけてリサーチに行きました．それらの研究機関の広報の人と，１年間キャッチボールしながら番組の中身を練ることができたことは，とてもいい経験でした．

最後はNHKの解説委員になり，テレビ・ラジオで話をしました．その時一番苦労したのは，誰が聞いているかがわからないということ．聞いてもらえなければ，自分の画像も話もノイズになってしまうので，「聞き手にとってシグナルになるような伝え方って何だろう」と非常に悩みました．

途中で2年間，イギリスの放送局に行き，毎日 3分ずつイギリスの科学の話題を紹介したことも，非常に勉強になりました．

その後，高エネルギー加速器研究機構に来ないかという誘いを受けました．丁度自分が身につけてきたノウハウで何か社会にお役に立つような仕事をしたいと思っていたところでした．また，声をかけてくれた方々に，大学時代の物理学教室の同級生が多かったこともありKEKへ行くことにしたのです．

岡田：KEKの広報活動での第一印象をお教え下さい．また，どのような点をどう変えていこうと思ったのですか？

高柳：加速器の物理学を研究している人たちは，分野が特殊なので国際協力が非常に進んでいます．若い人たちが，海外の機関に修業に行って，戻って来ているので，広報がいかに大切かということをよく知っていました．

当時はホームページが盛んになりだした頃だったので，私はまず，海外のホームページをいろいろ調べてみました．

海外の研究機関のホームページは，入口がとてもシンプルで，興味さえ持っていれば，低いところから高いところまで，ステップアップして情報が集められる．日本の場合は，情報が過多で，自分が本当に知りたいことにどうやって辿り着けばいいかわからない上に，行き止まりが多い．そこで，ホームページの改善を一生懸命やりました．

また，「広報室ができたから，あそこに任せておけば，広報は全部やるだろう」と組織が思ったら，広報室は死んでしまうのです．広報室というのは，細胞膜のイオンチャンネルのような存在です．イオンチャンネル（＝広報室）は，細胞（＝組織）にとっては絶対必要で，内部と外部とをつなぐ役割をしています．広報室は組織の表面にいますが，外ともつながっていて，ある意味では切り離してもいいものです．よく言われることですが，海外では，トップが変わると，広報室長が変わりま

す．だから，切られない限りは自分たちの主張を通せ，というような環境作りをしました．そのため，組織の広報と同時に，組織内での広報の立場を，きちんと一定のところに位置・維持するよう努力をしました．

岡田：KEKのホームページを最初に見て驚いたのは，子供のページがあることです．

高柳：子供のページは，私の着任前からありました．広報室が KEKにとって必要だと言い出したのは，実は若い人たちです．彼らが海外のいろいろなホームページを見て，すでにキッズページを用意していたので，私は，そこへ行きやすいような入り口を作りました．アメリカの研究機関のホームページを開けてみても，本当にキッズページが充実しています．

KEKで一番苦労したのは，英語のトップページを日本語に変えることでした．内部で，かなり話し合って変えました．また，研究者向けの部分を，外から来た人に，ここからは研究者しか入ってはいけないのだと思われないように，いろいろな設計を考えたりもしました．

ホームページの恐ろしさは，トップページから必ずしも入ってこないことです．検索サイトなどから，ぽんと入ってきた人に，部屋へ迷い込んだと思われたらダメなんです．ショートステイの人にも，ロングステイの人にも，どこへ入ってきた人にも，一応の満足を必ず持ってもらえるような階層ごとの設計が必要だという意思統一をしました．

岡田：ホームページの改良は内部の人たちでブレーンストーミングして行ったのですか？

高柳：内と外で議論をしながら作りました．内部だけでなく，アート系の大学の人に頼んで，おもてのページをもっと身近に感じるようにレイアウト設計をしてもらってもいます．

細胞膜は，中だけでなく，外と中を使い分けて生きています．それと同じように，広報室は，対内部の折衝口という役割も大事ですが，外側にあるいろんな知恵を集めてこないといけないのです．

岡田：今，広報が非常に専門化してきて，専門家的な手法を，中の広報室が持たなければならないと思います．高柳先生は専門家の手法を持っていらっしゃったわけですが，実際に広報活動をしていく上で，それがどのように生かされたのでしょうか？　また，中の組織をどうやって作られたのですか？

高柳：それは，本当にケースバイケースですね．ある状況の中での最適解を見つけないと広報はうまくいきません．

岡田：例えば，高柳先生の周りに，テレビにいたときのように，スタッフを置かれたというわけではないのですね．

高柳：広報の仕事のように，チームワークでやっている時に大事なのは，チーム全員が出来上がった作品に対して，「あれは自分の作品だ」と言えること．「これはみんなで作る仕事なんだ」という共通の意思統一をしっかり持ちながらやっていきました．

岡田：KEKでなさったことを振り返って，また，今のKEKの広報活動を見られて，一般論で結構なので，研究機関広報に対してご意見をお願いします．

高柳：研究機関の広報活動が多岐に渡ってきたせいか，例えばホームページにしても，個々のレベルの中の，一つ一つのところはすごく丁寧に書かれています．つまり．木から枝ができて，葉っぱがきちんと成長しているのですが，全体の木を見ると非常に複雑になっています．そこへ行って調べたい人には役立ちますが，初めて来た人にとっては，どう対応していいか分からないというような，そういう成長の仕方をしていると感じます．

また，いろいろな形での広報をやっているので，組織の一番やりたいことが，周りの人からは逆に見えにくくなってきていると思います．

人によって，必要としている信号は違います．ある人にとっては信号であるけれども，ある人にとってはそうではありません．「これはあなたの必要としている信号だ」とわかるような，うまいタグの立て方があると思うのです．

効率よく組織をやっていこうと思うと，様々なものが一律になってきますが，それではいけない部分もあります．例えば，最初から子供向けコンテンツをつくるよりは専門家に書いてもらって，ライターに子供向けに書き直してもらう方が簡単です．でも，本当は最初から子供向けに書くつもりで，用意しなければいけないと思います．しかし，問題はリソースの少なさです．皆さん，ものすごく少ないスタッフでやっていて，いろいろな課題を持っています．その中で，どう使い分けをしていくかが問題ですね．

そのひとつの手法として，僕は科学館のボランティアをバーチャルのスタッフだと思っています．六都科学館には，200人以上のボランティアの人がいて，その中のシニアの人たちは，いろいろなキャリアを持っています．リソースが足りないので，先ほどの細胞膜の働きでいえば，外側で使えるものを探してきて，自分の組織にしてしまうわけです．

本当は，外側だけでなく内側もうまく利用しなければならないのですが，内側を膜の言う通りにさせるには，かなり長い歴史をちゃんと闘いながら勝ち取っていかないといけないですね．

謝辞

このインタビューの企画，準備と実施は，目代，岡田の他，理化学研究所の浦野亜規氏，嶋田庸嗣氏，東京大学の神野智世子氏，産業技術総合研究所の廣江真夏子氏による．以上の方々に，記して感謝申し上げる．

注

1）インタビューの構成は岡田による．また，解題の文責は目代にある．

2）ミニシンポジウムでは，複数の研究機関の広報担当者によって，各機関の活動の紹介が行われ，各自が抱える問題意識や研究機関広報のあり方についての活発な議論が行われた．このイベントをきっかけに，研究機関広報担当者らの研究会「科学技術広報研究会」が組織され，活動を開始している．